

絹本着色和東天神縁起

附 北野天神縁起 二巻、段簡二紙

寛文十二年壬子九月の奥書がある

相楽郡和東町大字園小字大塚四

天満宮

四幅（絵画・指定）

寸法 各縦 一四九・五cm 横 八六・〇cm
時代 南北朝時代（一四世紀）

絹本着色掛幅装、各幅とも二副一鋪。

和東天満宮創建の縁起を四幅に分けて描く。各幅ともおおむね上から下、右から左に物語が進行しているが、第二幅では配流の場面が上下に分断されている（これは承久本北野天神縁起に例がある）こと、光信本北野天神縁起では第一幅に置かれた都良香の逸話が第二幅に描かれることなど乱れもみられる。

天満宮（以下、「和東天満宮」と記す）は社伝では建長三年（一一五一）に天満宮を勧請したと伝え、本殿（重文）は細部手法からみて室町中期頃に改造されたと考えられるが、棟木墨書から貞和四年（一三四八）の建立とされる。本縁起第四幅下辺に描かれる社景は、流造の本殿の両側に春日造の社殿を配し、拝殿が馬道のついた割拝殿の形式であるところ、境内が小高い丘にあるところなど現在の和東天満宮の社景と同一である。

本縁起に描かれた場面には、解釈できないものもあり、何にもとづいて場面を選択したのか、現在のところ明らかにすることはできない。しかし、都良香の逸話は梅津次郎氏によって甲乙丙の三種に分類された北野天神縁起の系統のうちの乙類にしかみられないものである。いづれにしろ、先行する縁起絵をもとに、他に採られていない逸話も含んで、画面構成上、各場面の比重を勘案しながら自由に再構成した天神縁起の一異本と位置付けることができる。さらに、第四幅最下段に当社の社景を描きこむことによって、和東天神縁起としての独自性をもたせている。

全体の場面配置は的確で古様を保っている。また、先行絵巻におうところが大きく異なる各場面ごとの図様構成には古様が感じられるが、

個々の景仏の描写には太い線で輪郭する粗豪な筆致がみられ、一部に身体比例を欠いて頭部が過大になった室町時代に見られる人物描写の兆候が現れていることから、古典絵巻から稚拙な画風が台頭してくる南北朝時代の作とみてよい。本殿棟木墨書や本縁起に描かれた社景、本縁起の様式などから本縁起は南北朝時代、貞和再建をあまりへだたらぬころ、再建にかかわって制作されたと考えられる。また、本縁起とともに寛文一二年（一六三二）の奥書をもつ二巻の詞書が伝わる。乙類の詞を書写したもので、奥書には応永の末の詞書が伝わっていたのをこのとき写したとある。近世にいたって本縁起絵を理解するために書写したものと推定される。掛幅形式の作例は稀であり、しかも南北朝期にさかのぼると思われる本縁起は貴重なものといえる。（文責 米屋優）



附 北野天神縁起



和東天神縁起第二幅



和東天神縁起第一幅



和東天神縁起第四幅



和東天神縁起第三幅

木造千手観音立像
ちくぞうせんじゆかんのりゆうぞう

一軀（彫刻・指定）

長岡京市浄土谷堂ノ谷二

楊谷寺

寸法 像高 一六九・八cm

時代 平安時代（一二世紀）

楊谷寺の本尊像で、本堂（府登録）内の厨子に安置される。同寺は現在西山浄土宗に属するが、寺伝では大同元年（八〇六）清水寺の開祖延鎮により開かれたと伝え、空海を二世とする。

直立し、頭上に十一面と阿弥陀化仏をいたたく、通形の四十二臂の千手観音立像である。

ヒノキ材寄木造で、布張りの上に漆箔仕上げ、目は彫眼とする。頭部を通じて正中線で左右矧合わせ、内刳りをほどこし、三道下で割



首とするとかと思われる。背面は肩部に横一材を当てるほか、地付きまで背板風に一材を当てる。両腕は肩から別材製とし、合掌手、宝鉢手の他の脇手は前後三列に並べ、台板に取り付けている。

相好を小作りにし、目は細く伏し目がちに穏やかに表す。宝髻の高さは低く、衣文の彫りも比較的浅く、胸から腹にかけてのヴォリュームの変化も少なく、平安時代後期の特色がよいが、膝前の衣文には変化もみられる。

脇手がほとんど後補のものに替わっていることが惜しまれるが、体幹部は堂々とした作風で、当代の作品のうちでも出色のものである。現在は楊谷観音として信仰を集めている。

等身を超える藤末鎌初の典型的な千手観音立像としてその価値は高い。（文責 米屋優）

もくぞうびしゃちんてんりゅうぞう
木造毘沙門天立像

一 軀 彫刻・指定

船井郡日吉町大字中世木小字宮前一三

普門院

寸法 像高 一〇一・四cm

時代 平安時代（一二世紀）



鎧を着け、右手を腰にあて、左手に戟（後補）を執り、正面に忿怒の相を向け、腰をやや左に捻、右脚を遊脚として、邪鬼（後補）を踏んで立つ。

ヒノキ材製の寄木造。頭部は耳の後ろで前後に寄せ、体部に差し首にしている模様である。体部は脚部を含み大部分一材から彫製し、背面裳先部を含み、背板風に一材を当てる。また、左側面に一材当て、さらに左腰部前面に一材を寄せる。両腕はそれぞれ前後に矧ぎ、手首は別材製。その他、袖先、天衣、足先に小材を寄せる。

右手指先、天衣遊離部、袖の一部、右足先の一部、持物、邪鬼、彩色は後補であるが、概ね当初の部分が残り、保存は良好といえる。

普門院は現在高野山真言宗であるが、歴史については明らかでない。この毘沙門天像は、現在は本尊の観音菩薩像の脇侍として祀られているが、もとは牧山裏坂の引尾峠の頂上に安置されていたものであると伝える。

小さめの頭部で、忿怒の表現も眉根を寄せた両眼とひき結んだ口だけにとどめ、全体に穏やかなふんいがある。軽くひねった腰高の軽やかなプロポーションは平安時代後期の京都で制作された天部像に共通するものがあり、本像ではそれらの特徴がいかにも手慣れた感じで表現されている。

造像の由来が明らかでないことが惜しまれるが、保存状態も良く、平安時代後期の毘沙門天像の典型を示す美作として、その価値は非常に高い。
（文責 米屋優）

木造扁額 額文「海住山寺」

裏面に「承元二年^辰十一月廿七日書之桑門瞻空」の墨書がある
額文「海住山寺」
二面（工芸品・指定）

相楽郡加茂町大字例幣小字海住山二〇

海住山寺

寸法 (在銘) 縦五八・八cm (縁込七二・二cm)

横三九・四cm (縁込五二・〇cm)

(無銘) 縦六三・〇cm 横四二・〇cm

時代 (在銘) 承元二年(一一〇八)

(無銘) 鎌倉時代(一二世紀)

在銘のほうは、額面はスギ材一枚板製。一重枠で内・外区に分け、内区中央に「海住山寺」と文字の縁を陰刻し、その内部に胡粉を盛って文字を表現する。外区胡粉地に緑青、丹等の顔料で縹細彩色をほどこす。猪目を各辺に二か所ずつ貫通させる。外縁部は、額面とは別材製の後補のものであるが、正面及び側面に緑青で彩色し、蕨手を描き、蕨手部分には金箔を押す。

裏面に「承元二年^辰十一月廿七日書之／桑門瞻空」の墨書がある。無銘のほうはヒノキ材縦三枚刳。刳目に麻布を巻き、鏝でつなぐ。

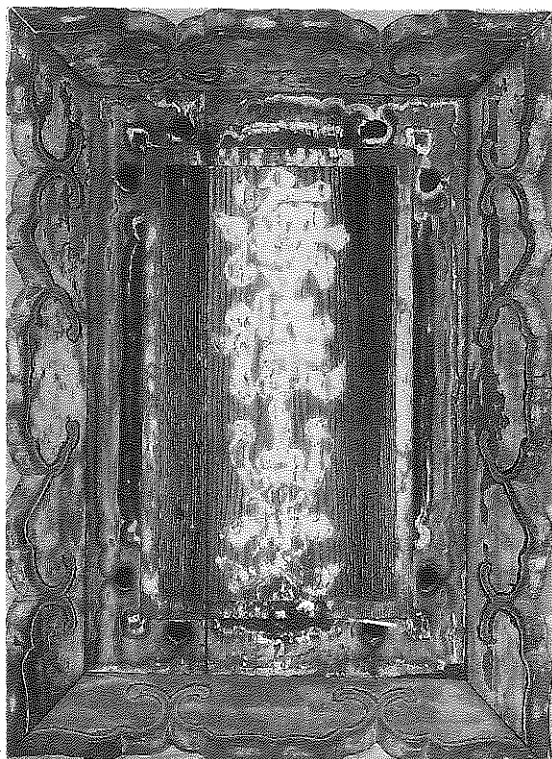
一重枠で内・外区に分け、内区は胡粉地とし、中央に黒漆で「海住山寺」と書す。文字には後補部分がみられる。外区は漆下地に金泥で縁取りし、胡粉、朱、緑青で蓮華文を描く。上下辺に二か所、左右辺に四か所の猪目を開けるが貫通していない。側面には、漆地に菊花文をほどこすが、これは後補と思われる。

在銘のほうは銘文から制作年代などが知られるが、無銘のほうも形状などからみて、在銘の方とほぼ同時期のものと考えられる。

海住山寺は、鎌倉時代以前の歴史は明らかでないが、鎌倉時代初頭に解脱房貞慶が復興したことで知られる。貞慶は興福寺の僧であったが、建久四年(一一九三)笠置寺に隠棲し、さらに承元二年(一一二〇)海住山寺に移り、寺の復興に着手した。本扁額の筆者瞻空も貞慶と同時期の僧で、相楽郡当尾小田原寺に住した。瞻空は承元三年笠置



海住山寺扁額 (無銘)



海住山寺扁額 (在銘)